

クローンからの脱却

中島 平太郎

1989年に導入したCDRは「CD コンパチブル」つまりCDのクローンをつくる記録メディアで、CDの制作、少量生産に最適のツールであると同時に、違法のクローンが作れるという、音や映像を取り扱うソフト業界にとっては光と影の二面性を持っている。

実際には、ソフト側で光の部分を活かしきれず、影の部分が先行する不幸なスタートになったが、NASAや米国特許局のデータの記録に展開したのが幸いして、CDRの生産は年率2.5倍の増加で伸びていった。

2002年にはCDRの世界年間市場規模は100億枚を超えた。スタートの経緯からは予想し得なかった大きな数字で、オーディオ(アナログ)カセットテープの最盛期の50億枚を倍以上凌駕し、21世紀の記録メディアの主流の地位を確保したという嬉しいニュースであった。反面、ソフトの違法クローンもCDRの生産数量にリンクするかのよう増加し、ソフト業界からは音楽産業の秩序を破壊するものとして「CDR海賊」の異名を戴き、「インターネット海賊」と共に二匹の悪魔退治が03年度の命題と言われるに至った。正にCDRの光と影を色濃く象徴したデジタル時代の宿命でもあった。

アナログ時代の記録メディアが、記録によるソフトの質の低下が幸いして、LPレコードやFM放送の音楽ソフトのコピーで重用されたのに対し、デジタルメディアの役割変更が決定的にソフト業界との関係を悪化させてしまった。

2002年を境として若い人達を中心にライフスタイルが変わり、音楽や映画などのエンターテインメントの楽しみ方や楽しむ時間が大きく変わってきた。携帯電話の爆発的な普及と機能の充実、パソコンとインターネットがマッチして好みの音楽や映画を簡単に視聴するスタイルが定着し始めた。ソフトの入手方法もパッケージに加え、かつて悪魔呼ばわりされたNET配信も加わった。音響のCDR、映像のDVDRに対する風当たりも風向きも多少下火の傾向になったが、基本的にはクローンであることに変わりなく、その枠から抜け出すことはできなかった。CDRの40倍高密度のBDRが加わり「R」シリーズのラインアップは整備されたが、光ディスク全体のじり貧傾向をとめるすべがないまま推移している。時流に流されるまま手を拱いて記録メディアがこの世から消滅して良いものだろうか。

記録メディア「R」シリーズがじり貧状態から脱皮する道は、記録の役割をクローンだけに依存するのではなく、当初の頃データ領域に進出して発展してきたように別の道にその活路を変える必要がある。幸いなことに2010年代になって「情報」が大きくクローズアップされてきている。数年前から公共機関や企業の情報漏洩が取り沙汰されてきた。つい最近の新聞記事は図書館の書籍情報を保存したフィルムの劣化を報じている。何よりも国家の情報管理や処理に国の命運がかかっていることは今遭遇している東日本大震災でも痛感しているところである。従来から言われているようにe-文書を始め膨大な情報資料の電子化が急務なのに、掛け声だけで大きな進展を見ないままになっている。本来ならば国が率先して推進すべきだが、成り代わって具体的に提案してみたい。

先ず、電子革命の受け皿になるメディアは現状では高信頼性の「R」以外には考えがたい。「R」メディアを「情報の記録」という新しい目標にそうように積極的に変身させる。「R」の出発点「CD コンパチブル」は情報別互換に変え、書いたら消せない「ライトワンス」の特徴を活かす。それらを軸に、メディアの保存、管理、検索などを「情報」の記録保存という新しい命題に向けて仕立て直し、クローンから大きく舵を切り替えれば、国家の要請に応えるとともに新しい「R」メディアの発展も期待できる。「R」がポツンとからでは手遅れになる。今なら間に合う。「R」の仕立て直しの第一弾として、長期保存の観点から寿命推定試験方法の制定(ISO/IEC 109955)、試験機関の設立(Archive Disc Test Center - NPO Entity)を行った。今回東京都市大学環境情報学部情報メディア学科横井利彰教授の力をお借りして、デジタルアーカイブの研究を共同で進め、個人、企業、国家、にとって財となる「情報」の安全管理や有効活用に関わる検索方法を明らかにしていくつもりである。

執筆者略歴

中島 平太郎 (なかじま へいたろう)

1921年(大正10年), 福岡県久留米市に生まれる.

戦時下の1944年(昭和19年)9月東京工業大学電気工学科卒業後, 九州大学大学院特別研究生として音響学を学ぶ.

1947年(昭和22年)10月, 日本放送協会(NHK)入局.

熊本中央放送局をふりだしに, 技術研究所(東京・世田谷・砧)で音響研究部門を歩く.

65年(昭和40年)音響研究部長, 68年(昭和43年)放送科学基礎研究所所長.

64年(昭和39年)東京オリンピックにおける音響システムの責任者としての仕事ぶりは著書「次世代オーディオに挑む」に表れている.

71年(昭和46年), 当時社長だった井深大氏の「物づくりは楽しいぜ, 来なよ」との囁きでソニー入社. ソニーの音の基礎を築く.

常務取締役技術研究所所長, 音響事業部長, デジタルオーディオ部長などを歴任.

83年(昭和58年)アイワ(株)に転じ社長.

89年(平成元年) (株)スタート・ラボを設立し社長.

93年(平成5年)CD開発の功績により紫綬褒章を受章.

81年(昭和56年)日本音響学会会長, DAT懇談会会長を経て, 92年(平成4年)社団法人日本オーディオ協会会長, オレンジフォーラム会長に就任.

2001年(平成13年)4月オレンジフォーラムが発展的に改組された, 任意団体CDs21ソリューションズ会長に就任.

工学博士. 「いい音」から「最高の音」, そして「心地よい音」を求めて“音の匠”の夢は尽きることがない.

<http://www.cds21solutions.org/jp/cds21/profile.html>